Nikaho City Research

2021

にかほ市リサーチ　Nikaho City Research　2021

研究経過報告

にかほ市
リサーチ

Nikaho City Research

2021

研究経過報告

にかほ市 × 秋田公立美術大学
協働プロジェクト

にかほ市リサーチ

Nikaho City Research

2021

にかほ市リサーチ

04 **はじめに**

にかほ市に湧き上がる魅力的な風土と、
秋田公立美術大学の研究視点が重なり合う

07 **フィールドワーク**

5.7 …… 象潟〜仁賀保高原〈下見〉
6.18 …… 象潟〜仁賀保高原
7.15・8.25 …… ヒアリング
8.24 …… 鳥海山
10.21 …… 遊佐町
12.1 …… 仁賀保〜金浦

40 **クロストーク**

「にかほ市リサーチ」から、「ジオカルチャー研究プロジェクト」へ

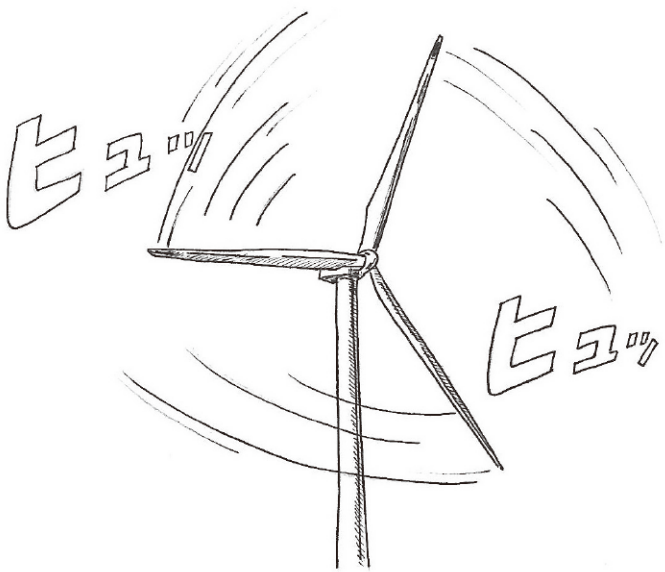
50 **ジオカルチャー研究プロジェクトの可能性**

多彩なアクティビティを楽しむ…… 萩原健一

九十九島から流れ山を知る
ジオカルチャー研究構想 …… 井上宗則

鳥海山麓地域の潜在力
「ジオカルチャー研究プロジェクト」に向けて …… 石倉敏明

にかほ市に湧き上がる
魅力的な風土と、
秋田公立美術大学の
研究視点が重なり合う



にかほ市・秋田公立美術大学協働プロジェクト「にかほ市リサーチ」は2021年度からスタートした官学連携プロジェクトです。にかほ市に湧き上がる魅力的な風土と、美術大学による独自の研究視点が重なり合うことで、未来に向けた新たな地域資源の発掘を目指しています。

当初、プロジェクトメンバーが抱いていたイメージは、デザインやアートの観点から、にかほ市をフィールドとして何かしらの成果物を制作することでした。地図や彫刻、あるいは地域めぐりツアーのような内容です。初年度となる2021年度はリサーチ期間と位置づけ、秋田公立美術大学の教員や学生らがにかほ市を多様な角度から掘り起こし、土地の特性に触れながら研究や成果物のヒントを探し出すことを重視しました。

しかし、にかほ市をめぐり、地域との関係性を強めていくほど、表現活動だけでは捉えることができない多様な価値と魅力に気づくことになりました。一時的な表現活動では到達できない深淵さを感じ、私たちは視点を大きく転換することになりました。

この報告書には、「にかほ市リサーチ」の1年間の足跡を記録しています。土地に触れていくことで、どのような調査の変遷があったのか。その背景を追体験していただきながら、一緒に「にかほ市リサーチ」の可能性について思いをめぐらせていただけたらと思います。

尾花賢一

フィールドワーク

「にかほ市リサーチ」は2021年5月、にかほ市をめぐるフィールドワークから始まりました。プロジェクトメンバーである秋田公立美術大学の教員・石倉敏明（アーツ&ルーツ専攻）、井上宗則（景観デザイン専攻）、萩原健一（ビジュアルアーツ専攻）と、コーディネーターの田村剛、尾花賢一（NPO法人アーツセンターあきた）が、にかほ市と周辺地域を学生と共にめぐり、それぞれの専門・研究活動のシードとなるような魅力や課題、可能性の掘り起こしを目指しました。

　多様な専門分野の視座から見つめたにかほ市は、プロジェクトチームの目にどのように映ったのでしょうか。リサーチで得られた知見や人との出会いから視野を広げ、独自の研究へとつなげ、立ち上げていくプロセスの記録です。

5.7

象潟〜仁賀保高原

〈下見〉

◎尾花賢一　◎田村剛

象潟中学校横の空き地

象潟郷土資料館

09:00 ▸ にかほ市役所象潟庁舎集合

この日はフィールドワークに向けた下見。にかほ市の担当者と挨拶を交わし、市役所の設備や広報物を見学。

09:10 ▸ 象潟中学校横の空き地

丘のように盛り上がった場所を見学。雨上がりの土壌は水分を含んだ苔類でフカフカ。季節も暖かくなり植物の芽生えを感じた。ちょうど中学校が休み時間だったため、窓から手を振る男子中学生がいた。その姿がかわいい。象潟中学校の体育館は、松尾芭蕉の頭巾がモチーフになっていることを知る。

09:30 ▸ 象潟郷土資料館

齋藤一樹元館長に館内を案内してもらい、70万年以上前からのにかほ市の成り立ちを聞く。埋れ木から知る火山活動の痕跡、九十九島にはそれぞれ名前があったこと。江戸時代の資料から、象潟という土地が当時の人にとって憧れであり、旅の最終目的地だったこと。その後、池田修三の木版画作品を鑑賞。地域の人々に愛され、お祝い事や記念日の贈り物として親しまれていたことを聞く。

10:25 ▸ 象潟海水浴場キャンプ場

海水浴場では海開きに向けて準備が始まっていた。この海岸で盆小屋行事が行われていることを知る。周辺を観察するとモンゴルのゲルを使った宿泊施設も準備を進めていた。海水浴場に隣接するキャンプ場は幼少時代の記憶を呼び起こすような、懐かしいつくり。過去の思い出と重なる部分があり、親近感が湧いた。

10:45 ▸ 鳥海山の山裾へ登る道で

海岸から山へと向かう道を車で進むと、段々に広がる稲田には田植えに向けて水が張られ始めていた。標高に合わせて産業や生活様式も変化していく光景に、にかほ市の多様な風土を感じる。この日は快晴。思わず路肩に車を一時停車し、雄大な鳥海山を眺める。

10:50 ▸ にかほのほかに（旧上郷小学校）

廃校となった小学校をリノベーションし、ワーケーションやイベントなど多彩な活動の拠点として整備中の施設を見学。ちょうどウッドデッキを点検している最中だった。この場所で活動している地域おこし協力隊の方にもインタビューを行う。県外からにかほ市に惹かれて移住した話を聞き、にかほ市の県外に向けた働きかけや関係人口への取り組みに触れることができた。また、この施設から見える鳥海山が最高!! サウナを検討中とのこと。こんな環境で過ごすことができたら幸せだろうな。完成が待ち遠しい。

佐藤勘六商店

11:15 ▸ 佐藤勘六商店

イチジクの製造・加工・販売を行う佐藤勘六商店を見学。近年のイチジクの盛り上がりを知るだけに、佐藤玲さんがその立役者の一人と聞き、テンションが上がる。シーズンオフだったため収穫作業などは拝見できなかったが、加工場や保冷庫を見学できた。昔ながらの甘露煮だけでなく、イチジクを軸とした食文化の発信や交流事業など期待溢れるお話だった。ビジョンを語り、行動できる人々が集まるところがにかほ市の魅力のひとつだと感じる。

12:35 ▸ 湯の台食堂で昼食

「昼食は何を食べますか?」と聞かれたが、全くイメージが湧かなかったためお薦めのラーメン屋に行く。ラーメンはたまにしか食べないし、好みとか特にないし…とあまり期待しないで向かう。しかし、ここのラーメンに衝撃を受けた。それぞれ味わいが違うチャーシューと麺の食感。「後からまた食べたくなりますよ」と車中で言われていたが、見事に術中にはまってしまった。店を出た後も(今も)心のなかはラーメンでいっぱいだ。

13:05 ▸ 小滝温水路(上郷温水路群)

冷たい鳥海山からの雪解け水を日光で温め、稲田へ引き込むための用水路。段差を付けて水を落とし、湧水をかき混ぜていく構造。水面を近くで観察しようと近付いて、ぬかるみに落ちる。真っ白い靴が泥だらけになってしまった。

横岡集落のサエの神

5.7

本郷の湧水

13:15 ▸ 横岡集落のサエの神

路肩に突然、道祖神。しかもインパクトのある造形。横岡集落に点在する塞の神はいつか実物を見てみたいと切望していたので、急な登場に感動を通り越して驚いてしまった。いろいろな角度からじっくり観察する。

13:22 ▸ 本郷の湧水

稲田の横に水を汲む人を発見。車を降りて近寄ってみると鳥海山からの湧水を採取できる場所だった。冷たくてまろやか。豊潤な味わい!! 数カ月経った後なのに、あの時の感動をいまだに思い出す。

14:15 ▸ わくばにかほ

旧上浜小学校をリノベーションした施設。地域におけるビジネス創出、企業活動の支援を行う場所として2021年に誕生した。1階には小学校の面影が多少あるものの、イメージを刷新する大胆な機能転換が行われていた。設立の背景や思いを聞くと、スタッフが自分で可能な部分は工事したとのこと。その熱意と技術に驚く。スタッフだけでなく利用者も若い人が多く、新たな交流拠点としての可能性を感じた。自分たちの居場所を自分たちでつくり上げる気概に溢れた場所だった。

15:00 ▸ 鳥海山の裾野から

車に乗って取材をしていると、いつの間にか鳥海山が大きく近づいてきた。窓の外を眺めれば海まで一望できる。海沿いの住宅が密集した場所から標高が高くなるにつれて田畑が増え、その合間に住まいが点在しながら鳥海山へとつながっていく。途中には噴石だろうか、大きな岩がゴロゴロと転がっている。あの岩に名前はあるのだろうかと考えた。

15:05 ▸ 仁賀保高原南展望台

登り坂が急になり、風車が近くに見えてきた。訪れた場所は展望台。風力発電の風車設置に合わせて造成された場所だ。天気も良く、海までが一望できる。山体崩壊により土砂が流れ落ち、海へと流れ込むことでにかほ市の特徴的な地形は生まれた。およそ2,500年前の自然の営みが眼前に広がることで、この土地がつくられた時間の積層を体感することができた。

15:30 ▸ 仁賀保高原・土田牧場

爽やかな初夏の風が吹く土田牧場。この場所に来たら何も食べないで立ち去ることはできない。お腹のラーメンが落ち着いてきたこともあり、テラスでソフトクリームを食べる。風景を眺めながら、それぞれの土田牧場での思い出を語った。

16:10 ▸ 象潟漁港

夕方の競りを見学。たくさんの発泡スチロール製の箱に海産物が並び、テキパキと取引が進む。ぐわっと人が集まり、パパッとやりとり。あっという間に売買が完了し、トラックの荷台に運ばれる。完璧な無駄のない動きは美しい。漁港に立ち込めていた熱気はほんの数十分で収束し、会場を出ると穏やかな水面とカモメの声、そして鳥海山が佇んでいた。

象潟漁港

16:45 ▸ 漁港にて解散

町から海、山へと1日かけて、象潟を中心としたにかほ市の史跡・名所をめぐった。これだけでも豊富な体験に溢れているのに、まだまだにかほ市には魅力的な場所や出会いが待ち受けていることに胸が躍る。特にこの日は、地域をよく知る方々にご案内いただけたので、ただの観光では知ることのできない土地と人をつなぐエピソードに触れることができた。このコースを参考に、教員や学生とのリサーチを始めていくことになる。

尾花賢一

6.18

象潟〜仁賀保高原

◎石倉敏明 ◎井上宗則
◎萩原健一 ◎田村剛
◎尾花賢一

09:00 ▸ にかほ市役所象潟庁舎集合

にかほ市の担当者と挨拶を交わす。5月の下見をもとに市内をめぐることに。

09:15 ▸ 象潟郷土資料館

5月に引き続き、齋藤一樹元館長に館内を案内してもらう。象潟の地形、特に九十九島の成り立ちについて聞く。自然による地面の変化が、人の暮らしだけでなく心に刻まれる風景をも変えていくことを蚶満寺・覚林和尚による九十九島保護の闘いから知る。北前船関連では、産物を下ろして空になった船倉に西国の石がバランサーとして積まれていたり、水に強いアイヌ装束が使われていた歴史を聞いた。展示されている物の奥に、面白さが隠れている。象潟をめぐるには、郷土資料館は起点として外すことができない。

10:15 ▸ 象潟中学校横の空き地

象潟中学校の建て替えによって出た土砂を盛ってできた低くて丸い丘。ここの使い道に困っていると耳にする。苔が生え、ブタクサが一面に咲いているなど柔らかな雰囲気のある場所だった。ここに何かを設えるというよりも、何かをしてみることから始めることに可能性を感じた。地面や植樹の状態、鳥海山の方角などを確認。

象潟郷土資料館

元滝伏流水

10:45 ▸ にかほのほかに（旧上郷小学校）

リノベーション状況や地域おこし協力隊スペースを見学した。ここは2016年「いちじくいち」の会場だった場所。TEAMクラプトンによる参加型のリノベーションによって、内装や調度品、デッキなどが手掛けられ、今後はオフィス利用も可能に。

11:00 ▸ 横岡集落のサエの神

生殖器崇拝のなかでも多く見られる男根崇拝物は、道祖神として集落の端の三方に祀られている。その内、2つを訪問。髙橋商店で飲み物を買う。本郷の清水で水を飲む。

11:45 ▸ 元滝伏流水

10万年前に流れ出た溶岩に沿って湧き出た水が、末端の崖で複雑な滝となっている。その水量や苔むした岩の色などに豊かさを感じる。木洩れ陽とモコモコとした濃い緑の岩の連続、水飛沫による涼しさから感じるやさしさが、動植物にとっては脅威でしかないとてつもない自然現象から始まったこともまた、この地の風景が持つ重厚さだろう。重厚であるからこそ、何かやさしさを感じるのではないか。いくつかの家族が弁当を持って行楽に来ていた。そこが風景として記憶に残る機会があるということ。

12:45 ▸ 湯の台食堂で昼食

無化調で丁寧に作られたラーメンは、パンチ力で記憶に残るというよりも、ふとした時に「あの美味いラーメンの味はどんなだったかな」と思い出す感じ。衝動的に、今もまた行きたくなっている。

大森集落にて

13:15 ▸ 小滝温水路（上郷温水路群）

工事期間S2-S35。5路線、総延長6km。冷水を温める装置として、日光に当たる時間が長くなるように平らにされた川（水路）には底に石が敷き詰められている。30年以上かかったこの大土木工事に掛けた想いを知りたい。

13:30 ▸ 仁賀保高原南展望台

風力発電の風車設置に合わせて造成された展望台。鳥海山の山容が見られ、その地形から紀元前466年の鳥海山の山体崩壊による土砂の流れがイメージできる。この日は雲が晴れなかったが、晴れた日は滝や山肌まで眺められて見飽きることがない。鳥海山山頂から海までわずか16kmという地勢の景色が醸し出す特異さも体感することができた。

14:00 ▸ 大森集落の才の神道祖神

仁賀保高原南展望台から象潟に下っていく途中、ふと銀色の鳥居が見えた。皆が揃って「見てみよう」と降りたところが、大森集落の才の神だった。大森集落には鬱蒼とした鎮守の森があって祠があるが、横岡集落では祀られている場所の裏が開けた田んぼだった。時代の流れのなかで、道祖神の見え方は変わっていくのかもしれない。

14:30 ▸ パティスリー白川

明治20年創業の老舗菓子店。鳥海山をモチーフにしたシュークリームは残念ながら売り切れ。

九十九島

6.18

14:45 ▸ 蚶満寺、九十九島

これまで4回ほど訪れたことはあったが、九十九島の形成と危機を知ると興味の持ちようが違う。九十九島への道は、光の具合や土の色、松林などの雰囲気にどこか南国を思わせる明るさを感じた。また、案内板の全体的なイメージと風景の印象に乖離があるなどデザインの課題も感じた。この豊かなにかほ市には伸びしろがあることを、逆に嬉しく思ってしまった。

15:30 ▸ 象潟海水浴場、象潟モンゴルヴィレッジバイガル、象潟海水浴場キャンプ場

15:45 ▸ 象潟漁港

5月に続き、象潟漁港の競りの様子を見学。見ているだけでとにかく面白い。ザーッと並べられた魚やタコや貝やらは、スーパーで見るものよりも倍は大きく、何やら元気そうで美味しそうである。巨大なアンコウは裏返しに置かれ、胸びれがあたかも人間の手のようであるのも初めて見た。どのような仕組みで進んでいるかは分からないが、心地よく流れていく。どんどんと運ばれ、16時に始まった競りは30分ほどでほとんど済んでしまった。仲買人は夕方に象潟、金浦と周り、翌朝の豊洲市場に間に合わせるのだという。この地域は、もとより外を向いて生きてきたのだと知る。

建物の外に出ると晴れてきた空と漁船の光景が異様に格好いい。「この眺めはヤバイ」と陳腐な言葉しか出てこないが、いつまでも見ていられる。ここで暮らし、日々散歩で通うのもいい。と夢想してしまった。

16:45 ▸ 解散

心に残る
空と海と漁船の光景

6.18

秋田市からにかほ市に近づいていく途中、遠くにあるとは思えない鳥海山がますます大きくなり、一度見えなくなって、そしてドンッと顕れる。海に流れ込んでいく稜線の流れにも心打たれる。まちの人に聞くと、やはりこの光景のありがたさを毎日感じているそうだ。

象潟は、雄大で、さわやかで、複雑で、濃醇だと感じる。山から街に滑らかにつながる象潟を大きくめぐる形でのフィールドワークとなったからか、移動するたびに印象がコロコロ変わる、そんなイメージを持った。さらに仁賀保や金浦を頭に思い浮かべていくと、まだわずかしか知らないにもかかわらず、にかほ市に見え隠れする環境と人との関係の多様さとそれぞれの際立ちに目が眩んでしまう。もし10年住んだとしても、知れることなんて極々一部なのだろうと想像した。

鳥海山から流れ出る水は限りがない。そう信じてしまえるほどの流れを見た。水が尽きない安心感とそれをもたらす鳥海山。その揺るぎなさと美しさは、にかほの人々にとてつもなく大きなよりどころを与え、このまちの寛容さを醸しているのだ。

田村剛

7.15・8.25

ヒアリング

◎田村剛

にかほ市×秋田公立美術大学
事業連携の可能性を探る

秋田未来株式会社 …… TDK歴史みらい館 …… 飛良泉 …… にかほミュージアム

❶製品化・プロダクトデザインの可能性

にかほ市内の機械加工業は高い技術力を持ち、特に精度においては日本有数である。高い技術力、ものづくり技術は、大学との共同研究にもつながり、新しい機器の開発などを産学連携で進めていることを秋田未来株式会社の六平澄人氏から聞いた。一方で、開発したものを人が使用するものとして設計するプロダクトデザイン的な観点には課題があるようだ。秋田公立美術大学の教員と共同研究を行った際、プロダクトデザインからのアプローチが製品化に役立ったと話されたのが印象的だった。

❷技術活用による教育および人材開拓の可能性

機械加工業では、基本的には求められた精度で生産が為されるものと考えられる。一方で、次の時代のために加工方法の開発や精度を高めていくなど、技術的発展に対する欲求を持っていることがヒアリングやインタビュー記事などからひしひしとうかがえた。例えば、普段の生産内容とは直接的には関係のない「ものづくり」の機会があれば、保有技術を活かしながらも高度な技術や科学の活用拡大が期待でき、そのための創意工夫が相互の人材育成につながるのではないだろうか。

❸プレゼンテーション、展示デザインの可能性

秋田未来株式会社と酒蔵の飛良泉、それぞれで同じように話題に上ったのが、見本市への出品や店舗での商品陳列の仕方などに改善の余地があることである。自分たちの技術や商品、文化をどう伝えるか。それをかたちにするのがアートやデザインの力であることを考えると、明確なビジョンを持っている事業者にとって展示デザインは今後ますます必要とされる分野だと思われる。そこに美大のリソースを活かすことで、より魅力的なプレゼンテーションへとつなげることができるのではないか。

❹公共空間におけるサイン計画の可能性

どのような経緯で制作されてきたか調査が必要だが、公共空間におけるサインや看板について、デザインコントロールがあまりされていないように見受けられた。美大が関与することができれば、どんな可能性があるだろうか。デザイナーの導入や市外や県外の制作会社への発注といった方法だけではなく、地域の看板制作を担う方々と協力して課題に取り組むことなども考えられるのではないか。

❺地域ブランディングの可能性

見えにくくなっていた生産と消費のサイクル、ネットワークを取り戻そうとする動きが、秋田県内各所で見られ始めている。にかほ市では、例えば「いちじくいち」がそのひとつの顕れと考えられる。そこで生まれた人のつながりが、スペースづくりなどの他の活動に派生している。

今回のリサーチにおいても、各所で自然と生業の連続性や連関についての言及があった。また、自然から先端技術までを包含するにかほ市という条件からも、自然→一次産業→二次産業→三次産業と一方通行でつながって終わりではなく、自然に戻していくような循環を大きな環で構想することができるのではないかと期待する。循環をつくる過程で、ペダルを踏み込むような行為が必要になるだろう。力強い活動をつくったり、リサーチや表現活動のなかで他の人たちを巻き込んだりと、美大の力はそこで発揮できるのではないか。サスティナブルな循環がライフスタイルに醸成の期間をもたらし、根源的な価値として自ずと湧き上がってくる。にかほ市であれば、そのような「地域ブランディング」をすることができるのではないだろうか。

田村剛

8.24

鳥海山

◎萩原健一 ◎高橋鈴奈
◎須賀亮平 ◎藤本悠里子

［行程］

6:00　鉾立登山口…登山届を出す
8:11　御浜小屋
11:00　七五三掛
11:21　御室小屋
11:50　新山山頂
12:30　御室小屋 ……昼食を食べる
14:00　伏拝岳……脚が痛くなってきて焦る
14:45　文殊岳
16:30　鳥海湖……雨がぽつぽつ降り出す
18:30　鉾立登山口

秋田県と山形県にまたがる鳥海山は、新山（2,236m）が最も高い地点である。新山を取り囲むように9つあるルートのうち、秋田県側には象潟口、矢島口、猿倉口、百宅口がある。この日は象潟口から鉾立ルートで。鳥海湖畔を過ぎると、ガレ場が増えていく

登山道が整備されていてメジャーなコースでもある鉾立ルートには、日本海の眺めや外輪山の絶景を眺める楽しさと、ガレ場あり、岩場ありの面白さがある。初めて登る学生は、この躍動感あふれる大地を身体で受け止め、何を感じるだろうか

8.24

「鳥海山には、これまで何度かスノーハイキングに行っています。冬は危険なので登頂はせず、5〜6合目付近を散策し、ご飯を食べて帰ってくるだけですが、魅力的な山だなと思います。今回考えたのは、山頂まで登るメンバーと、祓川キャンプ場にテントを立てて料理をして待っているメンバーの2チームに分かれる計画でした。ところが、日が近づくにつれて天気予報が24日の夕方から雨が濃厚だったので、予定を変更することに。結局、前日の23日に象潟口に集合して車中泊し、全員で24日早朝から登り始めることにしました。登りはいつも通り賽の河原―御浜―八丁坂。七五三掛から分岐する千蛇谷コースで新山に向かいます。帰りは新山から行者岳―あざみ野を通る外輪コースで七五三掛に戻ることにしました。時々、西から雲がやってくる

8.24

ので、このルートのほうが眺望があり、楽しめました。休憩のたびに撮影時間をたっぷりとって、のんびりしすぎたかなという反省はありますが、徐々に脚に痛みが出たというのもあって、あえてゆっくりのペースで下山しました。トレッキングポールを持っていない人が脚を痛めないようポールを貸したら、貸した僕の脚が痛くなってしまい困りました（笑）。帰りは同じく脚を痛めた高齢のチームがいて、小雨の中、抜きつ抜かれつしながら励ましあって歩きました。駐車場に着いてすぐに日が落ちて、雨も強まったので、下山が遅れたら危なかったと思います。僕はこの登山体験の後にリサーチに入ったので、あまりジオパークのことを知らない状況で登っていました。噴火があって象潟の風景ができるような躍動感のある土地であることをあまり意識せずにいたのですが、確かに登っていると、様相がめまぐるしく変わったり、岩登りのセクションがあったり地形を楽しめる山行だと納得しました。コースも長くてかなり疲れますが、それ以上に楽しさがある登山だなと思います。メンバー全員、あんなに脚が痛かったのに、治ったらまた登りたくなっています。

天気予報を見て諦めましたが、当初のキャンプ場での合流計画がいいですね。今回は残念ながら実現しませんでしたが、機会を探ろうかなと思っています。料理やお酒を楽しみたい人はキャンプ場で寛ぎ、登りたい人は登頂にチャレンジ。渓流釣りやロードバイクなど、それぞれ鳥海山まわりでいろいろな遊び方をした人が、夕方キャンプ場に集結する。これは実現したいですね」

萩原健一

鳥海山周辺でどんな遊び方ができるだろうか。教員、助手、学生やアーティストそれぞれが鳥海山周辺の山、川、海をフィールドにして遊び、ここに集結してキャンプをしたら・・・。

8.24

「登山は初心者なのですが、鳥海山に登ってみたくて連れていってもらいました。いい天候ではなかったけれど、みるみる変わっていく景色に圧倒されました。足元ばかり見て登っていたら、顔を上げるごとに景色がまったく違っていて。まるで別の場所に出てしまったような、そんな錯覚がありました。それはゲームをしていて、別のエリアに行く感覚と似ています。雲の流れが速くて、さっきまで見えていたところが見えなくなったり、カメラを振らなくても景色がどんどん動いていったり。静止画の10秒って結構きついのに、カメラをただ向けるだけで絵がもつ。そんなことを思いながら、足を引きずりながら下りてきました。

これまで、人間と動物の関わり、人間と自然との関わりなど、自分とそれ以外の生命体・非生命体との関わり方をテーマにして、実写映像や手描きアニメーションなどの映像作品を制作してきました。卒業研究では、自分と他者の曖昧な境界と、関係性に着目。お互いの曖昧な境界をメタモルフォーゼというアニメーションの技法で表現することを試みました。モチーフからモチーフへと、姿かたちをなめらかに変形させながら動きを作っていく手法です。何がというわけではないのですが、鳥海山で実体験として得た感覚は、アニメーションの制作に活きていると思います」

高橋鈴奈

10.21

遊佐

◎井上宗則 ◎萩原健一
◎早坂葉 ◎椛澤詩乃
◎田村剛 ◎尾花賢一

にかほ市をめぐると、この土地が山と海に抱かれ、自然と共に生業を重ねてきたことをあらためて実感する。自然の恵みと脅威に晒されながらも歩み続けてきたにかほ市の歴史は、人間も生態系の一部であることを思い起こさせる。その中心にあるのは鳥海山だ。鳥海山との関係性に着目してにかほ市を調査していくならば、鳥海山を空から見下ろすように、山頂から広がるさまざまな土地に目を向けることで炙り出せるものがあるのではないかと考えた。研究視点を行政区で区切るのではなく、鳥海山を中心とした大きな文化圏として捉えてみるために、フィールドワークは一度、にかほ市の外へと視点を展開させることにした。

山形県遊佐町は、にかほ市・由利本荘市・酒田市とともに「鳥海山・飛島ジオパーク」として連携する自治体である。鳥海山を軸としたにかほ市と共通した文化・風習に触れることを期待して取材が始まった。リサーチには、新たな視点を設ける意味も込めて学生2人に参加してもらうことにした。アーツ＆ルーツ専攻に所属し、リサーチでたどり着いた源泉をアートプロジェクトへと転換していく研究をしている学生たちである。早坂葉は山形県酒田市出身。これまで故郷の風景から着想を得て、砂浜が徐々に日常を侵食していく過程を身体感覚に訴えかける作品として発表してきた。椛澤詩乃は自身の身体を起点とし、周囲の環境や人間関係から生まれたアイデアを発展させ、メディアを問わない作品を制作している。学生2人を含めて行ったフィールドワークから、意外な気づきへとつながることになった。

町の至るところに湧水が沸く遊佐町

にかほ市と遊佐町、それぞれに住んでいる人にとっての境界は、それぞれ異なるのではないか

「僕は鳥海山一円が好きで、土地での体験を自分の作品制作にもつなげていきたいと考えているのがリサーチに参加した理由です。遊佐町やにかほ市の人は、鳥海山を背負いながら生活をしているのでその存在が大きいと思いますが、同じ山形でも意識する山は違っていて。私にとってはむしろ、月山や湯殿山の方がイメージが強かった。にかほ市と遊佐町、それぞれに住んでいる人にとっての境界は、それぞれ異なるものなのではないでしょうか」　早坂葉

自然のなかを流動する海や水などに興味があります

「このリサーチには、面白そうじゃん、という理由で参加しました。進学で秋田に来たけれど秋田市内くらいしか行ったことがないので新感覚でした。遊佐町は湧水が『文化』として地域に根付いているのも新鮮で。私の地元・群馬には海がないので、自然のなかを流動する海や水などに興味がありました。

10.21

遊佐は、“水推し”ですね。山からの恵みに“推し”としてスポットを当てている。山の信仰と恵みの受け取り方に地域での違いがあるのかなと思いました。遊佐町で水と土地の関係性に触れて、早坂くんが鮭の遡上をテーマに制作した作品に彼の育った地域のことが作品に滲み出ていたことを思い出しました。今後、にかほ市でのリサーチでは、自分たちの視点だけでなく案内人のような人と一緒に歩けたらいいなと思いました。遊佐町のグリーンストアでは海産物の並びで地域の違いが分かって面白かったので。にかほ市内のスーパーでも、場所によって例えば野菜の陳列を見ただけでも違いが見えてくるのかな?」　椛澤詩乃

観光地ではなく、日常風景のなかに浸透している場所

「実家のある山形県寒河江市に帰省するときに酒田経由で月山道を通ります。途中、国道7号の車内から眺める風景がにかほ市や遊佐町でした。だから、国道を逸れて街並みに入るのは新鮮な体験でした。僕は遊佐町とにかほ市は緩やかな延長線上にあるものとして捉えていました。県境に看板はあるけれど、国道7号を走るだけでは秋田・山形の県境は気付かないし、意識しない。遊佐町では日常風景のなかに浸透している場所をめぐった印象でした。生まれ故郷の寒河江市や、紅花で有名な河北町は最上川との関係が土地の文化に強い影響を与えていますが、遊佐町は最上川を中心とした文化圏とは少し離れた印象を受けました」　萩原健一

にかほ市は比較的独立した文化・経済圏を持つのではないか?

「鳥海山を中心とする圏域として、にかほ市と遊佐町には多くの共通点があるのではと考えていましたが、むしろ相違点が気になりました。まちなかの至る所で水が湧き出る遊佐町の風景を知ると、圏域として一括りにできない、どこかに境目が存在しているのではと感じています。また、遊佐町が米の一大集積地であった酒田に隣接しているのに対して、にかほ市は比較的独立した文化・経済圏を有しているのかもしれません。

芹田・飛の両地区には、江戸時代に築造された波除石垣があります。有名な観光地ではないのですが、現在まで残されていることに魅力を感じます。にかほ市では今後、観光地として華々しいものだけでなく、長い時間をかけて形作られてきた場所を見ていきたいですね。最近、にかほ市のすり鉢状の地形が新聞で紹介されるなど、地元ではさほど注目されていないが知れば面白いと感じるものが多いのではないかと思います。

金浦にある山体崩壊からできた島々は、それぞれ何と呼ばれているのでしょうか? 象潟の九十九島は有名ですが、それとは異なる観光地化されていない場所にも目を向けたい。地域の文化を捉えていく視点として、地形の高低差を意識しながら見ていくだけでも意外な発見につながったりします。植生の分布状況などもその場所の文化を把握するのに役立つかもしれません」　井上宗則

10.21

湧水が噴出しやすい土地を歩いていると、
にかほ市との違いが感じられた。

鳥海山を見た感覚が違いました

「にかほ市と遊佐町では鳥海山を見た感覚が違いました。山並みや距離感、頂の形などの違いが強く感じられました。遊佐町にとっての鳥海山の印象をもっと取材しても良かったかもしれません。鳥海山（さん）、鳥海山（ざん）と、呼び方が異なることなど至るところで小さな違いが気になりました。にかほ市では山の裾野に住む人と沿岸部の平地に住む人、その居住場所に高低差がありました。山との距離感が、生活や文化の違いに表れていくのではないかなと思いました。今後は集落を見たり、専門家に話を聞いたり、もっと細かくにかほ市を見ていきたいですね」　田村剛

（「わくばにかほ」にて）

「わくばにかほ」で振り返りの時間を設けた

メリー牧場にて

10.21

にかほ市との共通項を探しに遊佐町をめぐるなかで炙り出されたのは、にかほ市との「差異」であった。鳥海山の周辺地域を大きな文化圏として捉えることで、その圏内に点在する小さな変化や細かな営みの集積が見えてくる。このような微細なグラデーションを生み出すのは、鳥海山が雄大で深い懐を持つからなのかもしれない。次のステップとして、幾重もの細かな要因に視線を注ぐことが必要ではないだろうか。

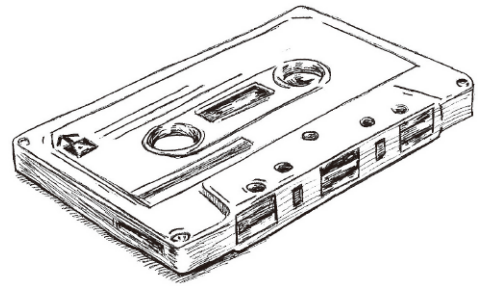
共同体や集団のなかでは、当たり前のこととして見落としてしまうような価値観や現象。そこに疑問を投げかけることで、にかほ市が持つさまざまな可能性に触れることができるのではないかと考えている。

尾花賢一

12.1

仁賀保〜金浦

◎結城亮 ◎田村剛
◎尾花賢一 ◎高橋ともみ



10:00 ▸ 金浦公民館

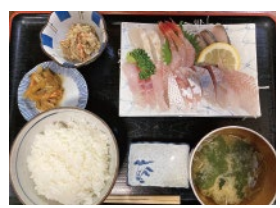
雪は少ないものの海風が冷たい。この日は主に仁賀保の博物館をめぐることに。

10:30 ▸ TDK歴史みらい館

昔の家電やカセットテープ、ビデオテープ、ラジカセからチームラボによる視覚化された磁性の体験型シアターまで楽しむ。

12:00 ▸ キッチンさかなやさん

昼食はにかほの魚を食べにキッチンさかなやさんへ。仲買人である主人が地元で水揚げされた鮮魚を買い付けて店頭に並べ、客は好きな魚と調理法を指定して店舗奥の座敷で待つスタイル。この日は4人とも迷わず「おまかせ刺身定食」を注文。獲れたて、捌きたてを完食。付け合わせの子炒りもおいしい。



12:45 ▸ 幸月堂菓子舗

明治43年創業の老舗菓子店。地元特産のいちじくの甘露煮と白あんを包んだいちじくパイが有名。いちじくが入ったどら焼きを買った。

齋藤宇一郎記念館

13:00 ▶ 齋藤宇一郎記念館（仁賀保勤労青少年ホーム）

齋藤宇一郎屋敷跡にある記念館を訪問。齋藤宇一郎の乾田馬耕や耕地整理、農地改革への尽力を知る。息子であるTDK創設者・齋藤憲三の失敗の数々にも触れる。旧仁賀保町の資料・文書・発掘物・農具など資料の充実ぶりに驚いた。帰りに職員の方と話す機会があり、記念館の成り立ちを聞いたほか「仁賀保金七郎疫病神詫び証文」のマグネットをいただく。仁賀保千石家の金七郎が疫病神に謝らせて書き付けをとった伝説があり、「仁賀保金七郎」と書いてあれば家に疫病が入ってこないとされ、江戸時代に流行したという。ぜひあやかりたい。

14:30 ▶ 飛良泉本舗

1487年創業の酒蔵「飛良泉」へ。東北で最も歴史があり、全国でも3番目に古い酒蔵。「飛び切り良い、白い水」という言葉と土地の「平沢」にかけた名称とのこと。山廃仕込みの限定酒を購入。

15:00 ▶ 白瀬南極探検隊記念館

16:00 ▶ にかほ市図書館「こぴあ」

16:15 ▶ 渥美菓子店

「あつみのかりん糖」を買いに。

12.1

この日、私がにかほ市で目にしたのは、九十九島や巨大な埋もれ木などの迫力ある自然と、そこに営まれてきた人々の確かな軌跡だった。

それらの観察のなかで、私はにかほ市について、「他の地域と緩やかに結び付きながら、独自性を育んでいる地域」だと感じた。一見、矛盾する態度のようにも思えるが、この適度なゆとりを持った芯の強さに学ぶことは多い。加えて、鳥海山を中心とした自然による途轍もないエネルギー、そしてそこに確かにある年月の重みを間近に感じ、それを目の前にしながら生活する人々の逞しさに想いを馳せた。これは過去、現在においても変わらない、にかほの魅力の根源である。この魅力は非常に刺激的であり、自分の制作意欲の向上につながったと感じている。まだ学び足りないため、再びにかほへと向かい、撮影やリサーチをしたいと考えている。

自分自身が感じたようなにかほ市の魅力が、さらに内外に伝わることを願う。仮に美術の視点から試みるとするならば、例えばアーティスト・イン・レジデンスなどの試みによって掘り下げたにかほ市の魅力を、プロジェクト的に広報してゆくことなどが考えられるのではないか。私もにかほ市に対し、美術を用いて向き合っていこうと思う。

結城亮

クロストーク

2021年5月から12月にかけて行ったフィールドワークと、各プロジェクトメンバーによるリサーチをもとにしたクロストークでは、次年度に向けた展望や、これから始まるプロジェクトの可能性について語り合いました。

それぞれの視点と、課題と、可能性は、どのようなかたちで展開していくのでしょうか。トーク後には、それぞれの専門性やスタイルから立ち上がる次年度のプロジェクトを包括する名称を検討しました。出てきたキーワードは、「ジオ（大地）」「エコ（生態系）」「ひと（人間）」、そして「カルチャー（文化）」です。

「にかほ市リサーチ」から、「ジオカルチャー研究プロジェクト」へ

◎石倉敏明　◎井上宗則　◎萩原健一
◎田村剛　◎尾花賢一

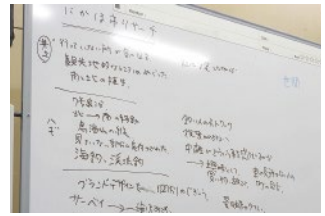
フィールドワークをもとに、複数の研究テーマを時間をかけて探索していく

尾花：当初は、フィールドワークをもとににかほ市の地図だったり作品をつくるというように動いていたのですが、そうではなく、もっと長い時間を使ってにかほ市のいろいろな資源を研究としてつくっていくほうが、にかほ市にとっても研究者にとってもいい関係なのではないかという話が出ました。そのことを市に相談したところ前向きに捉えてくださいました。複数の研究テーマを、長い期間をかけて探索していく方向性に変わっていくことになります。次年度はいろいろな研究テーマを掲げて、先生方それぞれ、あるいは学生を巻き込んだプロジェクトにつなげていければと思います。今回お集まりいただいたのは、この1年、フィールドワークやそれぞれのリサーチを経て、次年度に向けた展望や可能性、あるいは夢を語ってもらえればと思ったからです。僕のほうでもこの1年、報告書やさまざまな研究の資料を集めてみました。秋田公立美術大学が関わることで、また違う視点が生まれるのかなと考えています。

研究対象として、土地の特徴や面白さに入っていく

井上：この1年はリサーチ段階ということでしたが、行けば行くほど、行っていないところが気になっています。地形を見ると、本当に特徴的なので、実際に行って見てみたい場所がたくさんあります。これからは、研究対象を絞って、土地そのものの特徴や面白さを知る詳細な調査に入っていきたいなと考えています。

萩原：数年前、秋田に来たときからドライブなどで海沿いをめぐっていたので、



にかほ市はわりと訪れた気になっていたのですが、結局、国道7号沿いに意識が集中していたなという反省がありました。国道7号上の北と南の移動と、鳥海山に登ったことがあるとか、縦の移動しか体験していませんでした。今回のプロジェクトによって、まだ見えてない部分が多いことに気付かされました。エリアの捉え方が変化する機会になったのは、僕自身、興味深いです。同時に、いろいろな遊び方があるなと思ったこととか。まだまだ立ち入っていない部分がたくさんあることが分かったという段階ですね。まだ食べていないものとかも。

尾花：アクティビティというと、萩原先生はどんなことをされるんですか？

萩原：例えば海釣りと渓流釣りがこんなに近いところでできるのはいいですね。伊豆半島のように両方をフィールドにして、1日のなかで海に行って、途中から川に切り替えることができる場所はあまりないのかな。それが可能なエリアだというのは思いましたね。もちろん、川も海も両方をやっても忙しくて集中できない、ということになるかもしれないですけれど。

尾花：可能性はすごくありそうですね。石倉先生はこのプロジェクトに関していかがでしたでしょうか。

個別の体験を手繰り寄せて、ひとつの太い流れに

石倉：プレ調査のように回ってみるのはいいんだけれども、もう一歩踏み込んで、具体的にテーマを絞っていかないと大学と自治体の連携というの

は難しいだろうなとあらためて思いました。例えば、これまで「旅する地域考」をはじめとしてにかほ市をフィールドにした事業があったわけです。そこでプロジェクトを立ち上げた学生もいたり、教員もいたりしたので、それについてリサーチしてから進めてもいいんじゃないのかなと思いました。キュレーターの原万希子さんとか、アーティストのシャルミラ・サマントさんも来ていたので、その体験からもヒントが得られるんじゃないかなと思うんです。アーツ&ルーツ専攻では、芸術人類学者のアンソニー・シェルトンさんと一緒ににかほ市をめぐったことがあるし、そういった個別の体験を手繰り寄せて、ひとつの太い流れにしていくためのディスカッションと整理が必要なのかなと思いました。グランドデザインのレベルと個別のレベル、2つを同時進行で進めていく必要がある。全体の事業の流れを考えたときに、どういうことを目指すのかを考える方向性と、具体的にどういう落としどころをつくっていくかという2つを同時に走らせるような進め方が必要だと思いました。

大学と自治体の実績は大事なんだけれど、それを越えて、参加した人の実績になっていったり、そこから新しいアーティストや研究者が出てきたり、そういう土壌になっていかないと結局は書類のなかに埋もれてしまう。実装して、実効的なことをするためにはどうすればいいのかということを考えていければと思います。

アートプロジェクトとは違う、社会へのアプローチが導く可能性

井上：石倉先生の実装の話についてですが、建築や都市に関する研究分野は、そもそも社会実装が強く意識されています。ただ、そこにある背景はアートプロジェクトなどとはまた違う側面があります。都市計画的にいうと、トップダウンでプロジェクトを動かしたとしても、どこかでボトムアップな活動に変えないと継続していくことは難しい。その辺が今の課題かなと思います。打ち上げ花火的に数年はやったけれど、結局それで終わっちゃうプロジェクトは結構あると感じています。

この前、企業との共同研究で、「風の景観」というテーマでにかほ市周辺を調査しました。由利海岸波除石垣などあまり知られていない国指定の史跡を見たり、由利本荘市ですが塊村といって防風林のなかに密集して住んでいる集落を対象に、風環境のシミュレーションをして、この塀がないと風の強さがどう変化するのかというような研究を行いました。「風の景観」は、これまで見過ごしてきた地域を特徴づける風景を発見する試みでもあり、まだ着手したばかりなので、継続してやっていきたいなと考えています。

尾花：これからの方向性としては、すでに観光地化されているところに限らず、いろいろなところに目を向けていこうということですよね。フィールドワークのときに、浮き島になった一個一個に名前が付いてある島ってすごく注目されているけれど、その一方で金浦のほうに行くと、名前はないけど浮き島のひとつで、それがまた不思議な利用をされているのが面白いよねという話題が出ました。そういう名もない浮き島だとか、注目されていないものを見ていくのは大事ですよね。萩原先生は、釣り場ってどうやって情報をつかむんですか？遊ぶときにどういう視点で探していくのかというのが気になっていて。

萩原：最初は地図や航空写真を見てあたりをつけて行きます。良い磯があっても道から降りられないことがほとんどですが、近辺の海岸沿いを歩いて地元の人に聞いたりすることが多いです。ウェブサイトや釣りガイドで調べると釣りスポットはたくさん出ますが、実際に行ってみると、凄く混んでいて居心地が悪かったり、がっかりすることも多いのであくまでも目安ですね。検索に載らない釣り場の開拓が楽しめるかどうかは、人それぞれですが。ある場所に着くとそこに先行者がいて、お互い「よく、こんなところ来たね」という顔をする（笑）。僻地にたどり着いた者同士の交流があって。その場で盛り上がったりもする。釣りって、人とかぶるとすごくストレスなんです。同じところで仲良く釣りましょうというのは、あまりやらないので。そうやって人の来ないところにたどり着くと、裏をかいたつもりの人たちが出会うっていう。「この場所によく気付いたね」みたいな謎の戦友意識が湧いたりする。

ネットワークの結び目と、地域の豊かな営みと

萩原：中高生がどういうことを感じているのか？をもっと拾っていきたいと思います。秋田市に住んでいれば秋田駅前であるとか仙台に行くというのがあると思うのですが、いわゆるティーンと呼ばれる人たちはファッションや音楽であるとか、買い物に出る場所ってどこから情報を得ているのか。自分が高校生の頃を振り返ると、地元にあるレコード屋の若い兄さんが実はそのへんのカルチャーに明るくて多分に影響をもらっていたのですが。どの街にも中高生に情報を持ってくるファッションリーダー的な人物っていた気がします。今のにかほ市では、その人物はインターネット上にいるのか、もしくは別の存在が中高生に影響を与えているのか興味があります。

井上：以前、小学生に使い捨てカメラを渡して通学路を撮ってきてもらうというのをやりました。気づかされたのは、当たり前だけど彼らの目線は低いということ。道端の背の高い花が、それを見上げる彼らの視点では、青空を背景とした美しい風景をつくっている。それは面白い発見でした。

石倉：免許を持っていない人の視点というのは、モータリゼーション以前の視点なのでお年寄りの視点と近いところがあるんですよね。にかほ市で人が集まる場所は限られているからこそ、みんな自然にアクセスせざるを得ないというところもある。そこの自然の感覚をどう抽出するのかというのが大事かなと思うんです。多分、道の駅の裏側でタコを捕っているおじさん、おばさんを見ながらデートしている高校生とかいますからね。にかほの場合は、道の駅とか象潟駅がネットワークの結び目みたいなところ。そこら辺と、地域の分散したところの両方を見ていくのもいいかなと思うんです。それと、上郷地区の塞の神行事。小松和彦さんたちの秋田人形道祖神プロジェクトの重要な調査地でもあるので、ご一緒させてもらう手もあるんじゃないかなと。そして本海獅子舞番楽やチョウクライロ舞なども。以前、仮面を彫ってる人のリサーチをさせてもらったことがあります。

尾花：個人で伝統や文化を引き継いで担っている人には興味があります。それこそ、人に言われてやっているわけではないし、その人がどういう理由で引き継いでいるのか。

石倉：場所とか人とかを決めて、きちんと聞き書きをとっていきたいなと。そういうことはできるんじゃないかなと思うんです。

それぞれの専門性とスタイルから、それぞれのプロジェクトに

井上：例えば、特定の集落を対象にしてご高齢の方の1日の行動を観察したときに、よく腰掛ける石があったとします。その石を中心とした空間のあり方を、先端的な技術も導入しながら考えてみる。こうした観察に基づいて、見た目は昔ながらの集落なんだけど、実は"スマート集落"みたいなモデルが構築できれば、人口減少の進む秋田にとって有意義なのかなと考えたりします。3年ぐらいあれば形になるかもしれない。地元の企業と協働できるとよりいいですね。僕の専門領域からいうと、そんな感じです。プロジェクト全体としては、研究の軸みたいものなのが複数あって、それに学生が参加していくのがいいように思います。みんなでひとつのことを実現する軸もあれば、学生個人にテーマを与えて個々にやったものをまとめる軸があってもいい。

石倉：にかほ市の食文化は豊かなので、ベースにあるものを探っていくのも面白い。焼き畑文化があって、火野カブが秋田伝統野菜のひとつですよね。伝統野菜とかウサギの食べ方とか、地域の自然をどうやって食べているかのリサーチは、多分、食べ物だとみんなテンションが上がるので楽しいですよね。地域を調査してそこに何か仕込んで実験的なことをしてみるなど建築的な視点のプロジェクトがあり、山と海と自然への新しい関わり方や遊び方を探りながら表現につなげていくようなプロジェクトがあり。僕がやるとしたら、アーティストと一緒にリサーチに行って、そこに学生も入ってくるとか。それぞれのスタイルをプロジェクト化していくというのがあるんじゃないでしょうか。それらをするには、どこかにリサーチの拠点があるとすごくやりやすいと思います。学生や教員、研究者やアーティストが来て拠点にできるような場所があれば、そこからお祭りの調査に行ったり、食の調査に行ったり、山に登ったりということができるので。レジデンス施設があればすごく楽ではあると思うんです。そこに、現地に精通している人もいて。

萩原：そういう拠点があるなら、学生をたくさん連れて行きたいですね。

クロストークではこの後、それぞれの専門性をもとに始まる各プロジェクトを包括する名称を検討し、「ジオカルチャー研究プロジェクト」に決定。次年度は、にかほ市をフィールドに「ジオ（大地）」「エコ（生態系）」「ひと（人間）」という3つの存在区分を総合する概念に「カルチャー（文化）」をつなげ、新たな旅と移動を提案するプロジェクトが始動。

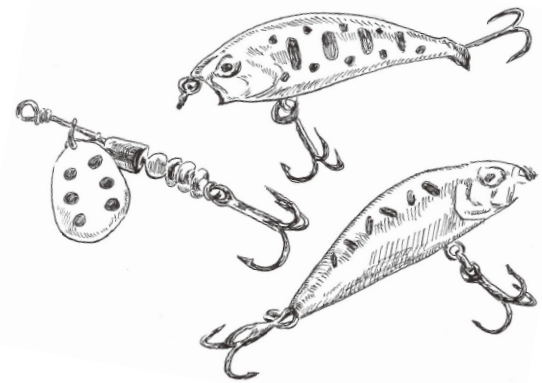
ジオカルチャー
研究プロジェクトの可能性

プロジェクトメンバーの3人が、専門性や興味から行ったリサーチをもとに、それぞれの「ジオカルチャー研究プロジェクト」を構想しました。

自然と人間の新しいつながりをメディアアートのノウハウを使って探るプロジェクトや、鳥海山の地形と人との応答関係をテーマとしたプロジェクトなどによって、教員と助手、学生やアーティストらが鳥海山麓の潜在力を探っていきます。

多彩な
アクティビティを
楽しむ

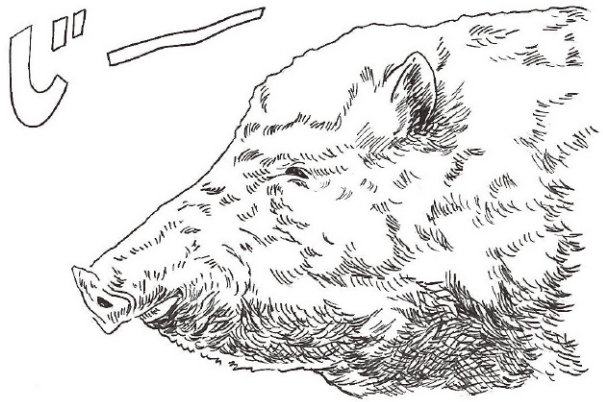
◎萩原健一



アイデアメモ❶

音と映像によるデジタル漁具実験

秋田県内企業と連携して、現在、芸術とエンターテインメントの観点から漁具の開発を行っている。この漁具は、釣り具のルアーとデジタルコンテンツを掛け合わせ、ムービーを表示することでルアー表面で光の明滅や音と振動を発するもの。釣果を追い求めるだけではなく、コレクションやカスタマイズを楽しむ、ホビー趣味に特化した商品開発である。人間の感覚を超えて、魚にとっていい映像、美しい映像とはどんな映像だろうか。人間ではない生き物を魅了する映像を学生やアーティストがつくることで、新しい価値が生まれるのではないかと考えたのがきっかけである。秋田県水産振興センターで水槽実験をし、水中カメラで記録をとるなどしてプロトタイプを制作して特許申請に向けて準備を進めている。自然と人間の新しいつながりをつくることに興味があり、今後、自然豊かなにかほ市をフィールドにプロジェクトを推進できるのではないかと考えている。

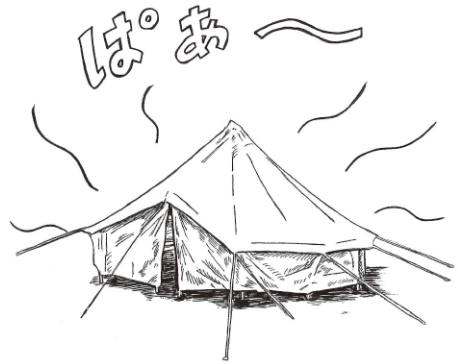


アイデアメモ❷

デジタル映像によるニホンジカ＆イノシシの獣害対策実験

近年、ニホンジカとイノシシの生息数は急速に増加し、生息域の拡大によって生態系や農林水産業、生活環境に深刻な被害を及ぼしている。温暖化や山間地域の人口減少による里山環境の変化などが原因と言われ、秋田県内でも年を追うごとに目撃数が増えている。当然であるが、動物は人間が区分けした行政区画の概念は持っていない。彼らも自然環境の変化に合わせ、少しずつ棲息適地を変えて活動しており、そこには人間とは全く異なる区分が存在しているであろう。有害鳥獣と称されるようになってしまった野生動物の生態を深く観察することによって、これまで見えなかった境界について考察することができるのではないだろうか。そのような背景を踏まえて、にかほ市周辺での有害鳥獣被害の実態調査を行いたい。

　他県では現在、獣害対策としてオオカミ型ロボットを作ったりロボットでレーザー光を照射したりといった取り組みが行われている。センサー



や画像解析テクノロジーなどの双方向性技術を応用した動物向けのインタラクティブな装置が、彼らの撃退に有用であると認められてきている。ここから発展させ、我々がメディアアート分野の技術を応用し、例えばプロジェクターなどの映像投影で撃退する実験はできないだろうか。

　ニホンジカやイノシシが嫌がる、あるいはニホンジカやイノシシを誘導する。そんなモーショングラフィック映像をクリエイターと一緒に制作したり、独自に音響装置を開発し里山にサウンドインスタレーションを展開するなど、さまざまな展開が考えられる。野生動物と人間の境界が曖昧になっている地域に入り込んで、農家や猟友会などの人たちと情報交換をしながら協力して進めていくことを考えてみたい。

萩原健一
1978年山形県生まれ。映像作家／研究者。写真表現を軸に、映像メディアを用いて作品制作をおこなう。2005年文化庁新進芸術家国内研修で山口情報芸術センター［YCAM］滞在後、2007年情報科学芸術大学院大学［IAMAS］修了。IAMAS助教を経て、2017年より秋田公立美術大学准教授。企業やプログラマーと協働したメディア教育教材の開発を研究の軸としている。《sight seeing spot》にてART AWARD TOKYO 2007特別賞受賞。同作品は第11回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品となる。主な展覧会に、scopic measure#6（山口情報芸術センター, 2007）、Media/Art Kitchen（東南アジア, 2013）など。

九十九島から流れ山を知る
ジオカルチャー研究構想

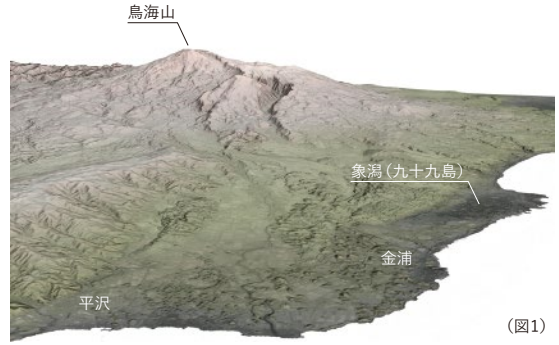
◎井上宗則

筆者らは、にかほ市の現地調査を複数回行い、次年度以降「ジオカルチャー」をテーマに研究プロジェクトを実施していきたいと考えている。とはいえ、「ジオカルチャー」は包括的な概念であるため、どのように研究プロジェクトを進めるかは、個々の研究者に委ねられる部分が大きい。そこで、ここでは筆者の関心事を示すために、象潟の九十九島を題材とした場合、どのようなジオカルチャー研究プロジェクトがあり得るのか検討してみたい。

かつての象潟は、入り江に多数の島々が浮かぶ独特の景観から、「東の松島、西の象潟」とも称される風光明媚な景勝地であった。現在は1804年の象潟地震により入り江が陸地化されたため、当時の姿は想像するしかないが、にかほ市の観光パンフレットや観光協会のウェブサイトで紹介されているような、鳥海山を背景に水田に浮かぶ小山群は、今も九十九島と呼ばれ、多くの人を惹きつける魅力的な景観であることには違いない。

この九十九島は、鳥海山の山体崩壊「象潟岩屑なだれ」により生まれたものであることは、よく知られている。筆者も初めて象潟を訪れた際に案内板か何かでこの九十九島の成り立ちを知ったが、正直なところ、現地にて島々を眺めていても鳥海山とのつながりを実感することはできなかった。

そこで、今回の調査の際に、地形を立体的に見直してみた（図1）。すると、鳥海山の山頂から北に向かう岩屑なだれの痕跡と、その先端に「流れ山」と呼ばれる小山が点在していることを確認でき、約2500年前の山体崩壊がこの地を形作っていることを視覚的に理解することできた。と同時に、流れ山が象潟よりも他の地域に多く存在していることに気づき、驚いた。



（図1）

平沢から金浦に至る沿岸部における流れ山は、象潟よりも分布の密度が高く、規模も大きい。鳥海山の山体崩壊を中心に流れ山を捉え直すと、九十九島は岩屑なだれのごく一部であり、他の流れ山とともに沿岸部のランドスケープを構築する地形的要素という別の側面が浮かび上がってきた。観光地として確立された天然記念物〈象潟〉のイメージが、筆者にとっては他の流れ山を知るきっかけとしてではなく、むしろその存在を覆い隠すものとして強く作用していたことを痛感した※1。

ひとたび流れ山の存在を認識すると、その様態が気になり、流れ山が各地域の景観を構成する主要な要素として、新たな視覚像を形成し始めた。九十九島にあっては、もともと海に浮かぶ小島という鑑賞物としての性格が強いといえるが、市街地に存立していたり、神社が建てられたりする流れ山にあっては、人々との生活との密接な関わりが推察

（図2）

され、各地域の生活環境の成立を考える上で興味深い存在である。

筆者はこうした地形と人との応答関係を中心に「ジオカルチャー」を考えていきたい。流れ山を例にすれば、地質的にその出自が同じであるということや形状の分析（大地の特徴）にとどまるのではなく、流れ山の歴史的変遷や地域における役割など（流れ山の生態的・文化的特徴）を整理していくことが考えられる。それは、九十九島を鳥海山の一部として捉える垂直な関係だけでなく、同時期に発生した流れ山群という水平なネットワークに位置づけることを意味し、にかほ市固有の“流れ山ランドスケープ”を浮上させることになるはずである。そして、この“流れ山ランドスケープ”に関する研究成果を多くの人に知ってもらうために、個々の流れ山をイラスト化し（図2）、例えばカード形式で提示してはどうだろうか。カード形式は、個々の流れ山を等価に扱えるとともに、いつでも加除が可能という開かれた系としてのジオカルチャーを印象づけることができる。いずれにせよ、研究成果の公表方法は、抽出するジオカルチャーと一体的に検討する必要がある。

以上が、現地調査を行いながら構想した流れ山の「ジオカルチャー研究」の概要である※2。ここで示した通り、ジオカルチャー研究は、にかほ市の代表的な観光資源を、集約的なものとしてではなく、その土地の魅力を知る導入として再定義していくことになると予想する。それは、新たな観光資源の開発というよりは、観光も含めた今後の地域の在り方を多角的に考えるための基盤になるはずである。

※1 例えば、日本ジオパークとして認定されている「鳥海山・飛島ジオパーク」において、九十九島以外の流れ山はジオサイトとして紹介されていない。このように、ある地域の固有性を示す際には、それを顕著に表す事物に代表させる傾向があるのではないだろうか。この関係が固定化され、さまざまな媒体で反復されると、結果的に本来の事物の連関が見えづらくなっていく。筆者は、ジオカルチャーをこの事物の連関を総体として捉え直す鍵概念として考えていきたい。

※2 ここで示した内容は、今年度現地調査を行いながら考えた内容であり、次年度以降の実施を想定しているものではない。

（図2）イラスト：野添静

井上宗則
1980年鹿児島県生まれ。九州芸術工科大学卒業。九州大学大学院博士前期課程修了。東北大学大学院博士後期課程修了。博士（工学）。東北大学助教、秋田公立美術大学助教を経て、2021年より同大学准教授。専門は、建築・歴史意匠。民間企業において携わった東日本大震災の復興計画等の実務経験を踏まえ、近年は国内外の集落デザインに関する研究を行っている。また、参加型のデザイン手法のあり方を模索しており、サイン、建築、公園、散策路等のさまざまな領域で実践的な活動を行っている。2022年は秋田でのフィールドワークの成果をとりまとめた「秋田の風展」を開催予定。

鳥海山麓地域の潜在力

～「ジオカルチャー研究プロジェクト」に向けて～

◎石倉敏明

鳥海山は古代から東北地方を代表する山岳信仰の要地として、多くの関心を集めてきた。現代では秋田県と山形県の県境が引かれていることから、重要な自然・文化遺産が異なる行政組織の管轄に属しているが、地球史的な観点から見ればその重要性は統一的に理解すべきものである。たとえば国は県境を越えた広域を鳥海国定公園に指定し、鳥海山および鳥海山麓地域に広がる豊かな自然環境を保護してきている。また、2016年には日本ジオパークネットワークが、鳥海山麓一帯から日本海の西方約30kmにある飛島を含む「鳥海山・飛島ジオパーク」を認定し、秋田県（にかほ市・由利本荘市）と山形県（遊佐町・酒田市）の三市一町の広域的な連携による鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会を構成している。

以上の広域的な関心は、単に地理学的・地質学的な研究に基づく公共的な自然保護に限定されるものではない。鳥海山の周辺に息づく自然環境は、生態学・生物学・環境学・資源学等の研究者にとって、ローカルな生命環境を観察し、その価値を広く一般化するための重要なフィールドである。さらに、江戸期には松尾芭蕉が訪れ、「東の松島、西の象潟」と讃えられた象潟をはじめ、蕨岡と吹浦を中心に山岳修験の歴史を育んできた「鳥海山・飛島ジオパーク」エリアは、歴史学・文学・宗教学・観光学・人類学等の人文系研究者にとっても魅力的なフィールドとして、ますます学際的な関心を集めている。2019年にはにかほ市や酒田市を含む多くの自治体の連携により、日本海の北前船交易を

顕彰する「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ―北前船寄港地・船主集落―」が日本遺産に認定され、環日本海の歴史を踏まえた広域的な「海のネットワーク」にも大きな注目が集まっている。

近年、日本海側の山と海をめぐる再評価の動きのなかで浮上しているのは、以上のように特定の専門領域を超えた、複合的な鳥海山麓地域の魅力である。こうした魅力を放つ事象は、これまでのところ、非生物（景観・地勢・山岳・海洋・気象等）、生物（動植物・菌類・微生物等）、人間（社会・言語・文化・宗教・芸術等）という大きな三分野によってバラバラに研究されてきたものであるが、この三分野を統一的に理解する見通しを得ることは、研究者の側でも、研究対象となる自治体にとっても、重要な課題であろう。「鳥海山・飛島ジオパーク」では、すでに日本ジオパークネットワークによるさまざまな取り組みと連携しつつ、「ジオ（大地）・エコ（生態系）・ひと（人間）」という三つの存在区分を横断する取り組みを進めてきた。※1 例えばジオパークネットワークが提唱する「ジオツーリズム」は、以上のような存在区分を横断する新しい旅を提案している。

秋田県はすでに、八峰白神エリア、男鹿半島・大潟エリア、そして鳥海山・飛島エリアという三つのジオパークを抱え、それぞれにグリーン・ツーリズムやアグリ・ツーリズム、フード・ツーリズム、ジオ・ツーリズムといった新しい旅を推奨してきた。しかしながら、文化面におけるさまざまな取り組みと、それぞれのジオパークが進めるプログラムの間には一定の距離が存在し、必ずしも有機的な連携が生まれているわけではないことは、今後の課題の一つであると思われる。今後の有益な指標として他県の例を挙げるならば、斬新な現代アートのプロジェクトを支える地方の先進的な美術館をめぐる青森県のアート・ツーリズム、温泉地の魅力を湯治文化や健康維持の地域的伝統と結びつける大分県のヘルス・ツーリズム、山岳信仰の歴史を踏まえた山形県・出羽三山の聖地巡礼ツーリズムといった事例は、いずれも各地のジオツーリズムとの相乗効果によって、より多くの人びとにアピールしてきた実績を持つものであり、今後も多くの成果が期待されている。

それでは、「鳥海山・飛島ジオパーク」のお膝元の一つであるにかほ市では、どのような魅力発掘が可能であろうか。この度、秋田公立美術大学に所属する有志の研究者は、にかほ市との連携によって、一年間に及ぶ予備調査を実施し、鳥海山麓地域の更なる魅力発掘のための「ジオカルチャー」に関わる共同研究を実施したい、と希望している。本研究は、「ジオ（大地）・エコ（生態系）・ひと（人間）」という三つの存在区分を総合する新しい概念として、「ジオカルチャー・ツーリズム（Geo-Culture Tourism）」というヴィジョンを掲げ、この包括的な視座の元に、それぞれの専門的な視座が見落としてきた、異なる領域の〈あいだ〉に新たな旅の価値を発見しようとするプロジェクトである。

「ジオカルチャー・ツーリズム」とは、筆者が「第33回国民文化祭・

おおいた2018 ／第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会『おおいた大茶会』の関連研究で提起したもので、旅や観光を目的とする集客や経済的な振興を目的とするだけではなく、人間と自然を深く繋いでいる統一的な生命環境としての「ジオス（地球）」と、世界中の多様な社会集団が培ってきた豊かな「カルチャー（文化）」をつなぎ、二十一世紀の新たな旅と移動を提供しようとする、新たな人類学的研究プロジェクトである。※2 筆者が所属する秋田公立美術大学は、工芸・デザイン・現代芸術を横断する、ユニークで実験的な専門教育を実施しているばかりでなく、大学院複合芸術研究科では、修士・博士の両課程に渡って一つの専門領域に留まらない、実践的な教育プログラムを実施している。こうした研究・教育機関に属する教職員と学生にとって、鳥海山や日本海という豊かな自然・文化スポットに位置するにかほ市との連携は魅力的であり、キャンパスを超えた広域的な学びや研究の場として、すでにいくつかの成果を得てきている。※3

筆者にとっても、にかほ市は小正月行事・盆行事・修験道儀礼・来訪神行事・番楽等の貴重な地域文化を継承する需要なフィールドであり、今後の研究を深めたいところである。※4「ジオカルチャー研究」は、以上の関心と展望をもとに、教育・研究施設である秋田公立美大と地元自治体であるにかほ市が協力することによって新たな研究領域をひらき、教育や観光、地域文化の興隆にも貢献する複合的探究を目指すものである。

※1「GEOPARK magazine vil.4」日本ジオパークネットワーク発行、2017年、60-63ページ。

※2 石倉敏明（監修・執筆）美術出版社（編）『おおいたジオカルチャー：第33回国民文化祭・おおいた2018 ／第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会『おおいた大茶会』関連ツーリズムブック』美術出版社、2018年。

※3 秋田公立美術大学アーツ＆ルーツ専攻では、2013年6月にはチョウクライロ舞見学ツアーを、2018年6月にはブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館長アンソニー・シェルトン氏と学生とのフィールドワークを実施している。また、文化庁採択事業「旅する地域考 | AKIBI複合芸術プラクティス」では、インドやインドネシア、カナダからの講師を招聘し、2020年冬ににかほ市をフィールドとする全国公募の合宿を実施している。詳しくは右記を参照。http://akibi-tabikou.jp

※4 2013年の開学以来、筆者は度々にかほ市を訪れ、とりわけその豊かな芸能・民間行事を現地視察している。2019年にフィンランド・ロヴァニエミ美術館で行われた展覧会「精神の〈北〉へ Spirit of the “North” vol.10 かすかな共振をとらえて」では、象潟の盆小屋行事を撮影した映像「祖先の魂の浜辺で」を含む作品「接触から共振へ」を発表した。
http://spirit-of-north.net/archivesvol10/

石倉敏明／人類学者
1974年東京都生まれ。明治大学野生の科学研究所研究員。1997年より、ダージリン、シッキム、カトマンドゥ、東北日本各地で聖者や女神信仰、「山の神」神話調査をおこなう。環太平洋圏の比較神話学に基づき、論考や書籍を発表。近年は秋田を拠点に北東北の文化的ルーツに根ざした芸術表現の可能性を研究する。著書に『Lexicon 現代人類学』（奥野克巳との共著・以文社）、『野生めぐり 列島神話をめぐる12の旅』（田附勝との共著・淡交社）、『人と動物の人類学』（共著・春風社）、『タイ・レイ・タイ・リオ紬記』（高木正勝CD附属神話集・エピファニーワークス）など。第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「Comso-Eggs|宇宙の卵」（2019）、「表現の生態系」（アーツ前橋、2019）参加。秋田公立美術大学准教授。

にかほ市リサーチ

Nikaho City Research 2021

プロジェクトチーム
石倉敏明（秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻）
井上宗則（秋田公立美術大学景観デザイン専攻）
荻原健一（秋田公立美術大学ビジュアルアーツ専攻）
田村剛　（NPO法人アーツセンターあきた）
尾花賢一（NPO法人アーツセンターあきた）

「にかほ市リサーチ」研究経過報告
2022年3月発行

ブックデザイン
須磨平

編集
高橋ともみ

写真
荻原健一、小田寧生、結城亮、藤本悠里子、田村剛、尾花賢一

挿絵
尾花賢一

制作
公立大学法人 秋田公立美術大学

印刷
株式会社イニュニック

発行
にかほ市
〒018-0192 秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田1番地

※にかほ市・秋田公立美術大学協働プロジェクト「にかほ市リサーチ」の一部として作成しています。

©2022 Akita University of Art
本書の無断複写・複製・引用を禁じます。